筋少説

第二夜

湘南チェーンソー

作・醍醐頼樹

原案・特撮・筋肉少女帯・大槻ケンヂ

今にして思うならば――

※この作品は特撮の名曲「湘南チェーンソー」を中心に、特撮・筋肉少女帯・大槻ケンヂの楽曲を参考（モチーフ）にして、醍醐頼樹が、書き上げたオリジナル作品であり、特撮・筋肉少女帯並びに、大槻ケンヂ他、各メンバーの関与は一切無い。

……潮騒が聞こえる。
何だかとっても疲れていて、車の中で僕は眠ってしまったようだ。
水平線の向こうからさす日の光が、僕の目を覚ます。
ララミー、湘南だよ。海さ。海だ。
夜明けの海岸は、サーファーが数人いるだけでとても静かだ。
サイゴに写真を撮ろう。三脚をセットしてファインダーをのぞく。
ララミーが爪先で揺れている。ふらふら、と。缶ぽっくりみたいな厚底シューズ。ヴィヴィアン……だか、ロックだか、そんな名前の厚底シューズだ。あまりにふらふらで、よろけて地獄に堕ちてしまうのではないか。いつも僕はそう思いながら、ララミーを見ていた。
ララミーは笑いながら、これが私のアイデンティティだ。
地獄に堕ちたって、このシューズと、この……ベイビー……なんだかという、不必要にひらひらのいっぱいついた服さえあれば私はどこにだっていける。そう言っていた。
パシャリ。オートシャッターが下りる。お別れの写真だ。
デジカメの液晶に綺麗に彼女がそしてついでのように僕が写っていることを確認すると、車の中に、三脚とカメラをしまい、その代わりに、東急ハンズで買ってきた、チェーンソーを取り出した。
今にして思うならば。僕はララミーに何ができただろうか。
恋を教えてあげればよかったのだろうか。悔やみながら、僕はチェーンソーをララミーに渡す。昔のホラー映画に出てくるような、紐を引っ張ってバルルル、バルルル、とエンジンを入れるタイプが欲しかったのだが、最近のチェーンソーはトリガーを引くだけで簡単に刃の部分が回転しだす……とハンズの店員に教わった。
バルウルルルルウウルウルルルルルルルルルルルルルル。
ララミーがトリガーを引くと、いい音が鳴り響く。
僕はやっぱりこのセカイが許せない。だから、一緒にこのセカイを滅ぼそう。このチェーンソーさえあれば、このセカイを滅ぼすことができる。僕は、そのことに気付いたのだ。
目を閉じてチェーンソーの回転する音を聞く。
ララミーは、湘南の浜辺に駆け降り、チェーンソーを振り回した。八月の濡れた砂は、昼間ならばもっとチリチリとしているのだろうが、夜明けの海岸はまだ冷たく、厚底シューズから堕ちそうになりながら、ララミーはくるくる回る。
逃げ惑うサーファー達。夜明けの海を見に来ていたカップルも家族連れもみんな逃げ出す。あははは。ララミーは屈託なく、笑った。
珍しく早く到着した警官隊に囲まれたララミーの不必要にひらひらのついた、白く、ミルクドレスが、血の赤に映える。
悲鳴。絶叫。阿鼻叫喚。八月末。もうとっくに夏は終わり――
そして、もう、とっくに――人は終わる。

夏の始まり。

夏が来ればいつも僕らは何かそこに期待をしてしまうものだ。何か今年はいいことがあるに違いない。でも、たいていは特に何もいいことなんてなくて、残されるのは八月三一日に大して何もない日々をどう日記に書こうかなんてうんうん悩む結果となる。

大学院生になって、夏休みに日記を書くなんて宿題がなくなったとしても、だからといって特に何か特別なことがおきるわけでもない。ただ、ひたすらに暑いだけだ。

クーラーの壊れた大学の研究室で粘菌についての資料を探すのに疲れ果てた僕は夏の暑さにやられてそんなことを考えていた。

もう、いいよ。こんなこと研究したってさ、別に僕は修士課程終えたら製薬会社に就職するつもりなのだし。資料を放り投げて昼間から酒でも飲もう。一人しかいない研究室でウヒヒと笑いながら、教授の秘蔵の焼酎をこっそり盗み飲む。

昼間からダメ人間だ。ウヒヒ。あー、もう、やっていられねえ。プールもってこいプール。とか。そんなことを思いながらうだうだしていたら、いつの間にか外は真っ暗になってしまっていた。

あー。今日も資料まとまらなかったなあ。教授が学会から帰ってくるまでに何とかしなくちゃいけないのに。こんな歳になっても、確かに日記は書かなくてもいいのだけれど、夏休みの宿題ってのは。あ、あるんだなあ。夕暮れ、少し涼しくなった部屋で、二・三資料をまとめ、こんな日は酒だ酒。と、昼間から焼酎を飲んでいたことなどすっかり忘れ、飲み屋をさまよう。

駅前は僕が通学のために引っ越してきた五年前にくらべてすっかり変わってしまった。今日はいつもの飲み屋に行こうか、それとも新しい飲み屋を開拓しようか。ニヒヒ。と舌なめずりをしながら、夜の街を徘徊（はいかい）する。

いつもは入ったことの無い路地を曲がると、ララミーと言う看板が目に飛び込んできた。

ララミー。なんだそりゃ。聞いたことも無い名前だった。外観からすると、ウエスタン風の飲み屋だった。うん。たまにはこういうのも良いだろう。夜の荒くれ物となって、保安官に逮捕されるのだ。

ドアを開けると中はまさに西部。なんて言うのか分からないが、西部劇には必ず登場する両開きのドアがきちんと用意されている。

店内は薄暗く、マスターと思われる人がカウンターで、カウボーイのような格好をしてグラスを磨いている。給仕（ウエイター）が僕を案内する。

カウンター席とテーブル席どちらが良いかを聞かれ、そりゃあ、カウンターのほうが気分出るでしょうと、カウンター席に座る。

背後では古い白黒の西部劇が上映されている。
コロナビールをとりあえずがぶがぶ飲み、天下のならず者を気取っていると、右目の端に異様なものが見えた。一瞬気のせいかとも思ったのだが、いや、然しそれは、ただの現実だった。
薄暗いマカロニウエスタンの中に、白い少女の人形……いや、それは人形ではなかった。生きている人間が、ぼうと、青白く光っていた。白とピンクでごてごてと着飾られている……ドレス……なのだろうか。それが、ブラックライトの光で光っているように見える。こんな場所にはふさわしくないと思われる格好で、頭には、なんと言えばいいのだろう。布製のティアラとでも言えばいいのだろうか。それが、おそらくアゴのところで結ばれている紐で止まっているのだろう……と思う。宙のどこを見ているのか分からないような目線で、緩やかな笑顔を佇ませて紅茶を飲んでいる彼女は、一言で言えば、こんな場所には全く持ってふさわしくないオブジェだった。
もしかしたら、僕が知らないだけで、どこかの国のお姫様がタイムスリップかなんかしてマカロニウエスタンに登場するB級映画でもあるのじゃないかと思えるほどに。
声をかけてみようかとも思ったけど、なんだか怖いような気もしたのでやめた。興(きょう)をそがれたような、何だか変な気分になってきたので、ウオッカを一杯飲んで河岸を変えることにした。
そんなことがあってから一週間が経ち、教授が遂に学会から帰ってきた。何とか編纂(へんさん)した資料に及第点を貰い、少し遅めの短い夏休みをもらえることとなった。
自慢の……といっても研究所の先輩から二十万で譲り受けたワゴンRに、最近お気に入りのCDを詰め込み、そうだ、海に行こう。江ノ島に行こう。サザンを聞こう。と、良くわからないテンションで家を飛び出した。
最近お気に入りのバッハ曲集のCDが一周したので、これまた最近お気に入りのX－JAPANのCDに変える。1曲目に収録されている紅の糞長いイントロが終わるころ、僕は一週間前にウエスタンな飲み屋で見た、奇妙な映像を思い出すこととなる。
チリチリと焼けたアスファルトがゆらゆらと、空気をゆがませている中に、彼女はいた。
まるで、蜃気楼(しんきろう)のようにゆらゆらふらふら、白い影は揺らめいた。
真夏の道路に白とピンクの不必要にひらひらのいっぱい付いた、しかも、こんな暑い日だって言うのに長袖の服を着た彼女は、妙に高い厚底ブーツを履き、これまた白とピンクのフリルのたくさん付いている日傘を差しながらふらふらと歩いていた。
まさか……な。車で一時間くらい飛ばしてきているのだ。もし、あの彼女だとしたら、何時間もかけて歩いてきたと言うのか。

それとも、あの格好で江ノ電に乗ってきたと言うのだろうか。
同じ格好をしている（そもそもそんな格好をしている人なんてほかにいるのか知らないが）、別人だろうと思いつつも、すれ違いざまに彼女の顔を見て先週のあの子だと確信した。
「ねえ君、暑いでしょ？乗らない？」
信号で止まった時、横をすれ違う彼女に何とはなしに声をかけてみた。彼女はきょとんとした顔で、僕を……いや、僕の向こう側を視た。そして、何かに気付いたかのような笑みを浮かべ、
「いいよぉ。そっかぁ。そうだよねぇ。江ノ島だもんねぇ。うふふ」
妙なことを口ずさみつつ、彼女は助手席に乗り込んだ。「ねぇ。お兄さんは、曲作りに来たの？それとも、原稿を？」
初めての質問がそれだった。妙なことを言うなと思ったが「海を見たくてね」と答えると、「ああ、やっぱりねぇ」と、ちょっとさびしそうな表情で外を眺めた。
「君さあ、先週、ウエスタンバーに居なかった？」
会話の取っ掛かりにでもなればいいやと思い、聞いてみた。
「え？お兄さんも、ララミーに居たのぉ？」
ララミー。店の名前なんてすっかり忘れていた。
「その、お兄さんて言うのやめろよ。はじめまして、マドモアゼル。大崎理博。大きい山崎の理学博士」大仰に言う。
「ふーん。リハクか。リハクよろしくな。私のことは、ララミーで良いよぉ」フランクに返される。
ララミー……というのかと思いつつ、ララミーって何なんだ？と、疑問の念が頭を駆け巡る。
「ララミーって、何？」
「知らないのぉ？あぁ。そうだよねぇ。ララミーって言うのはねぇ。クスクス。ララミー牧場って言うウエスタンのドラマがあってね。そこから取っているんだと思うよぉ」
「思うよって、どういうことだよ」
「うふふ。そういえば、おに……リハクも、ララミーに居たのかぁ」
「ああ、あの日、偶然あの店に入ってな。けったいな女の子が居るなあって」
「ふふ。けったいかぁ。そうだよねぇ。あの店では浮いていたよねえ。何で私があの店に居たか分かる？」
ララミーは微笑を浮かべた。
「ララミーっていうのはねぇ。ララミー牧場だけじゃないんだな」
さっぱり何を言っているのかが分からなかった。こんな真夏に長袖のフリルのいっぱい付いた服を着ているなんて、この子、……。
「私がね、昔好きだったバンドが歌っていた歌の曲名なんだ。懐かしくて、つい、入っちゃった」

「それも、ララミー牧場から取ったんかな」
「そうだと思う。よくわかんないけど。ああ、紅終わっちゃったね」
気付いたら、ＴＯＳＨＩは、20th Century Boyを歌い始めていた。二十世紀少年。Ｔ－ＲＥＸの名曲だ。同名の漫画もあるんだったかな。二十一世紀、僕は良くわからない女の子と、車で海に向かっている。これが、二十一世紀という奴なのだろうか。
そんな話を彼女に振ってみた。
「へえ。これ、Ｔ－ＲＥＸっていう人の曲なんだぁ」
「Ｔ－ＲＥＸていうのはバンドの名前な。って言っても知らないだろうけど。マーク・ボランがリーダーで。マーク・ボランは三〇歳を目前にしてこの世を去った天才で……」
「マーク・ボラン？……マーク・ボランの言うことにゃ～」
マーク・ボランという言葉を聞いて、アリゾナ砂漠に住むピエロがどうしたとか、よく分からない歌をララミーは口ずさみ始めた。
「どうしたの？」恐る恐る聞いてみた。
「そのバンドには、マーク・ボランの歌もあったんだよ」
いったい、どんなバンドだと言うのだ。
「今はもう、好きじゃないんだ」
「うーん。そんなこと無いけどね。そのバンド、活動を停止しちゃったんだ。だから、もう会えないんだ」
「活動停止したって、それぞれのメンバーは、まだ活動を続けているんじゃあないのかい」
「うん。そう。だけど、無くならなくってもね、形が変わっていっちゃったものはやっぱり、それとは違うんだよ。あ。そうそう。その、新しいバンドにはね、Ｘ－ＪＡＰＡＮの歌を流しながら、江ノ島でナンパする男の歌もあるんだよ」
何だかさっぱり分からないが……とりあえず、その歌のおかげで、彼女はこの車に同乗してくれたらしいということが分かった。
「それは、曲作りに来た男と、原稿を持ってきた男かい」
出会ったときのララミーの台詞を思い出し、聞いてみると、案の定だったらしく、凄いね、良くわかったね、知っているの。などと、かなり興味を引かれたようだった。
変な記憶力なら、負けないのです。
「で、その服は何なの？」僕は最も気になる……そして、不可侵とも思える領域に足を踏み出してみることにした。やばかったら足をすぐに引っ込めれば、沼から脱出するのも簡単だろう。
「えー。知らないのぉ。それでよくこんな不必要にひらひらのいっぱいついた服を着た子に声をかけたね。にひひ。私だったら絶対に声をかけないよぉ。これはね、ロリータ服って言って」
「ゴスロリ？」ロリータという言葉で思いついた単語を言ってみた。

「違う、違う。ゴスロリって言うのはゴシックロリータって言って、もっと黒を基調とした……まあ、あれも不必要にひらひらはいっぱいついているんだけどね。これはね、特に何もつけないで、ロリータって言ったり、白ロリとか、甘ロリって言ったりするんだよ」

なんだかさっぱり解らないが、そう言うことらしい。

「どこで、そんな服売っているのさ。まさか。ジャスコとか、ダイエーじゃ売っていないよな」

「ジャスコって、下妻物語じゃないんだからさ。下妻物語知っている？ちょっと前に深田恭子主演で映画化された、嶽本野ばら先生の小説なんだけどね。あの、フカキョンが着ている服も甘ロリなのね。その小説にも登場するんだけど、この服は、ＢＡＢＹ,ＴＨＥ ＳＴＡＲＳ ＳＨＩＮＥ ＢＲＩＧＨＴっていうブランドが作っている服で、ララミーは、代官山店の常連なの」

代官山。聞いたことはあるけど、行ったことはない。僕の中で、代官山にいる人たちはいつもこんな格好をしているのだろうかという考えが頭をよぎった。

「ねえ、みて」

彼女が左側を指差した。ああ、海が見える。

「海だよ。湘南だよ。海だあ。夏だあ。あはははは」

屈託なく彼女が笑う。

夏だ。夏だ。夏。

ざ・ざざざ・ざざざざざあ・ざざざ

湘南の波の音がノイズのように、頭骨の内側に広がる。

セカイが、ゆがむ。

ざ・ざざざ・ざざざざざあ・ざざざ

夏の始まり。

又、憂鬱(ゆううつ)な夏が来る。私は、夏が嫌いだ。いや、春夏秋冬好きなときなんか無い。夏が特に嫌いなのだ。

夏が来ると、あの日のことをどうしても思い出してしまう。中学2年生の私が部屋の中で泣いている。汗の臭いと尿の臭い。据えた生ゴミのような臭いと血の臭いと饐(す)えた精液の臭い。

赤く濡れたティッシュが私の周りに薔薇(ばら)のように。

全てが、蒸し暑い夏の小さな六畳で。

ざ・ざざざ・ざざざざざあ・ざざざ

私はあの日、私であることを捨てた。あの男は私を何度も求めて来た。ホントウハキモチイインダロウ？ヤニで汚れた歯をむき出しながら嫌らしく笑う。そんな暮らしが半年ほど続いた。

快楽など無い。痛みと嗚咽(おえつ)と屈辱(くつじょく)と。

冬が来て、私は実の母に殴られた。あの女は、私より、恋人の方を取ったのだ。私のあの人を何であなたが盗るのよ。母親ならば、私を救ってくれると信じていた。キインとノイズが流れ、全てがどうでも良くなった。目の前に置いてあった灰皿が、錯覚だろうか、ぐんぐんと大きくなっていくような気がした。全身がどくどくと脈打っているのが解った。ノイズはだんだん大きくなり、世界が反転した。ふと気付くと私の目の前であの女は頭から血を流し、豚のように地面を舐めていた。私の手には赤い灰皿。

私は、家を飛び出し、町を彷徨った。

もしかしたら、死んでしまったかもしれない。

そうしたら、私はヒトゴロシ？

そんなことを思って居たら涙が止まらなかった。涙を隠すように雨が降ってきた。駅の軒下で泣きながら雨を避けていると、本当に惨めになってきて、死にたい気分になった。

それからどうやって生きてきたのか……余りよく覚えていない。人間は本当に辛い記憶は忘れてしまうと言うが、きっと、そうなのだろう。顔は良く覚えていないが、氷のように鋭い目つきだけは何となく覚えている男に出会った。名前は何だったか。四畳一間トイレ・風呂なしという、この世の果てのようなアパートを世話してもらった。家賃は月二万円。私の部屋にはどこから来るのか、氷の男が、毎日違うおっさんを数人連れてきた。

どぶのような臭いのするおっさんの先っぽを口に含むだけで一万円もらえた。氷の男の取り分はそのうち三千円。月に三回我慢すれば生活できた。それでも氷の男は毎日おっさんを連れてきた。

おっぱいはプラス一万円、スマタはプラス二万円だった。

どんなことをされても、幾らもらっても氷の男は三千円しか受け取らなかった。その代わり、本番だけはするなよと言われた。

別に処女はこの世でもっとも嫌いな男に何度も奪われたし、今更そんなことはどうでも良かったけど、氷の男の言葉は重みを帯びており、私はそれに素直に従った。

それから二度の夏が過ぎ、私は一七歳になった。

来る日も来る日も先っぽを舐める日々。

ドウダイ？キモチイイダロウ？

気持ちいいだろう？気持ちいいわけがない。私が気持ち良いと言えば客は皆喜んだ。何故、男はそんなことで自尊心を満たそうとするのだろう。阿呆なのか。阿呆なのだろう。

私はその『気持ちいいだろう』と言う言葉をはきかけられる度に、あのヤニの歯を思い出して酷く憂鬱な気分になった。

気付くと、寂しくて泣きたくて堪らない夜が月に一度くらいおそってきた。寂しくて怖くて。怖くて泣きたくて。我慢できずに、私は左手首にナイフを滑らせた。

赤い線がすうっと腕に描かれる。銀色のナイフに脂が浮かぶ。白い脂肪が切れ口から見え、赤く染まる。赤は広がっていき――

思い描くのは、死。

死んだら、寂しくなくなるのかしら。

どくどくと流れていく血を見て私は気を失った。毎月毎月これより沢山の血が流れていくのは見ていたのだけれど、やっぱり腕から流れるのは違う。痛みは不思議と無かった。

ああ。死ぬのだな。

もう、目が覚めることはないのだな。

かわいそうな私。かわいそうな私。

次に生まれてくるときには。

もっと幸福な。

いや、いっそ、生まれてなど来なければよいのだ……。

気がつくと、氷の男が私の手首をにぎって止血していた。見てみると、思ったより血は流れ出ていないようだった。「馬鹿野郎。こんなので死ねると思うなよ」氷の男はほとほとあきれたと言う表情で私を見た。目の奥が黒く、深く。

それから、月に一度くらい手首を切った。何故かと言われるとよくわからない。死にたかったのか。と言われると死ねないことは解っていたし、ちょっと違うような気がする。

今にして思うならば、私はつまり、氷の男の気を引きたかったのだと思う。そんな簡単な分析で済むのか、自分の心ながら解らないのではあるが。

傷口は、重ねていくごとに治りが悪くなり、色も赤黒く変色していく。ある時、氷の男はいつもより黒い目で私に言った。

「醜いな。この傷口。三日休みをやるから、次に客に会うときまで隠す方法を考えておけ。死ぬなとは言わない。リスカ（リストカットの事ね）も別にかまいやしねえが、商品としての価値を落とすな。今なら包帯を巻いた少女って言うのもコスプレとして流行っているっていうしな。なんでもいいや。隠す方法を考えておけ。商品としての価値が無くなったら、おまえは要らない。不要だ。捨てるぞ」

醜い。商品価値。不要。私にとっては全ての言葉が恐怖だった。私は町を彷徨（さまよ）い、そして、ロリータ服に出会った。

ロリータ服は手首の傷を隠すのに最適だったし、醜い私の中身を隠すことも出来た。未だ世間的にはロリータ服の認知性は低かったし、何て阿呆な格好をして居るんだと去っていくお客さんもいたが、逆に、よその店では見ることができない服装。他の店ではすることが出来ないプレイと言うのが評判になった（らしい）。

氷の男も初めはこんな服はちょっと違うんじゃネエか。と、冷めた目で私を見ていたが、ある日から、数着ロリータ服を持ってきてはこの服が似合うのじゃないか。今回はゴスロリも良いんじゃないか。等と言うようになった。

こんな服装でお前の本名はあまりにださいよな。そうだ、お前は今日からララミーって名前な。今までの自分を捨てて、ララミーになるんだ。ララミーって言うのはなあ。俺が昔好きだったバンドの曲に出てくる登場人物でな。陵辱されて売られちゃうんだけどな。ああ、お前にぴったりだよな。

氷の男はそう言うと、裸の人間が尻をコチラに向けているＣＤを私にくれた。あまりにふざけた様な名前のバンドだったが、曲は美しく、中でも、ララミーという曲が大好きになり。そして、ララミーになった。

あの時と同じ海。だ。
ざ・ざざざ・ざざざざざあ・ざざざ。
チェーンソーの音が、波の音と、美しい旋律を奏でる。
さよなら、人類。
そう思ってふいにランニング姿のドラムが脳裏に浮かび、こんな最期なんて、まるで下らない深夜ドラマのようだ。と、思った。
ｉｐｏｄの電源を入れ、耳に音楽が流れ込む。Ｇ線上のアリアだ。ヨハン・セバスティアン・バッハの名曲。
そういえば、あの時も。

「『我思う故に我あり』だ」
「君さあ。研究室に来てもいいけど、邪魔しないでよ」
一応、マスター生である僕は学部生の彼に注意した。
「解ってないなあ。君は。薬学も哲学を取り入れる時代なのだよ」
「講釈は後で聞くから、今はこのレポートをまとめないと、教授に怒られちゃうからさ。ね。君もさ、って君は就職するんだっけ？」
友人はかぶりを振った。
「俺も、やっぱり院に行くことにしたんだ」
「あのさ。留年するくらい成績の悪い君が、どうしたら院に入れると思うわけ」
やれやれと彼は再びかぶりを振った。
「愚かだな。愚だ。愚の直行だ」
「骨頂な」一応、つっこんでおいた。
「五月蠅（うるさ）いな。直行だろうが直滑降だろうがどちらだって良いのだ。おまえが愚に向かって直行すると言うことが言いたかったのだ。僕は確かに君の言うとおり留年している。君と同じ年に入学したというのに、君はマスター、僕学部生。しかしだ。留年するというのは単純に言えば単位が取れないと言うことだ。僕の場合、一般教科の授業に面倒くさいから参加しない。すなはち、自主休校を決め込んでしまったがために、単位が取れなかっただけなのだ。院に進むのに必要なのは専門科目。僕はね専門科目の成績は良いのだよ」
八行もかけて説明しておいて何だが、彼が留年した理由、院に向かうと言うことは、僕の研究にも、そしてこの物語にもほとんど関係がなかった。
「で、だからどうした。俺はいそがしいんだ。おまえに構っているヒマはない。こいつをまとめなくてはいけないんでね」
俺は、目の前のモニタを示した。モニタには今日までにまとめなくてはいけない研究データの資料が山のように開いていた。

「まあ、聞けよ。俺はヒマなんだ」
ぶっ飛ばそうかと思ったが、もう、コイツに何を言っても仕方がないと思い、口と耳だけ彼に貸して、目と手はモニタに注視した。
高校時代からの腐れ縁だが、今日ほど面倒くさいのも珍しい。
「暇だなんて言っている内に、お兄さんの見舞いに行ったらどうだ」
彼の兄は癌の手術のために入院していた。手術は成功し、体調は恢復に向かっているという。彼の家に遊びに行った際などには良く世話になったし、手品を見に連れて行ってもらったこともあった。
「いやあ、昨日、コーヒー持って行ったばかりだしさ」
髪を掻きながら照れたような笑いを浮かべている。
「そんなことよりさ。安田の話知ってる？」
話を切り替えた。面倒くさいなと思いながら相槌を打つ。
「ああ、何か、宗教に嵌って居るんだっけ？」
「そうらしいぜ。８組の京也いるじゃん？」
いるじゃん。と言われても、高校時代など今は昔。今は８組に京也は居ないはずだし、５年も前のクラス分けなど覚えていない。そもそも、京也というのが誰なのか知らなかった。
「あいつがさ、君は呪われている。呪いを解いて欲しくばこの壺を西に置いて祈りたまゑ。って言われちゃってさ大変だったらしいぜ」
「ふうん」俺は気のない返事をした。
「しかしわざわざそんな話をしに君はここに来たのか」
「ちげーよ。最初に話しただろ？哲学だよ哲学。きみも、こんな勉強ばかりしていないでさ」
哲学だって勉強だろうに。と思うが無視して、レポートをとりまとめる。だが、彼の雄弁は続く。らしい。
「デカルトだよ。理系の人間というのは、哲学を否定するところから始める節がある。臨床だ実験だって。そんなことなんかより、やっぱり哲学なんだよ。哲学が解らない人間はだから宗教なんかに嵌ってしまうんだ。安田のように。人間は考える足なんだから」
「葦な」発音を注意する。目はモニタ。
「五月蠅いなあ。少し物知っているからってなあ。俺が思わなかったらこのセカイはないし、俺が居なかったらお前だって。ん？」
何だかよくわからないことを言った後、彼は何かに目をとめた。
「ＨＩＶ？」
「なっ」つい言葉に出して彼を凝視してしまう。知っているわけなど無いのに。
「どうしたんだよ。そんなに怖い顔をして。ほらこれ」
机の上に置いてあったプリントを手に取りひらひらと僕に見せる。やはり、知っているわけはないのだ。それは、助教授の相沢さんが次の学会で発表するために用意した資料だった。

「あ。もしかして触っちゃまずかったのか」僕の表情におそれたのだろう。おたおたとプリントを元に戻す。
「ＨＩＶかあ。エイズだよなあ。怖いよなあ」
「怖くなど無いさ」少し動揺しながら答える。「きちんとコンドームを付けていれば感染するおそれはほとんど無い。空気感染もしない。インフルエンザのウイルスの方がよっぽど感染力は強い。それに君は少し誤解している。ヒト免疫不全ウイルス（HIV）に感染していたとしても、免疫不全を起こしていなかったのなら、エイズとは言わない。ＨＩＶがＣＤ４＋Ｔ細胞を破壊し、体内のＣＤ４＋Ｔ細胞が著しく減少し、免疫不全つまり、免疫力が著しく低下した状態を、エイズ、すなわち後天性免疫不全症候群（AIDS）と言うのだよ」
「うん、途中から何行っているのかさっぱり解らなかったが、流石薬学部。と言うことだけは解ったよ」
別に、薬学部だから詳しいわけではないのだが。
「しかしさ。エイズなんてホモがセックスして感染する病気だろ？ジゴウジトクっつーかさ。そんな気持ち悪」
しまった。気付いたら彼を壁に押しつけ、喉輪（のどわ）を極めてしまっていた。エイズはそんなに単純な病気じゃない。未だに、こんな差別的な思考を持っている人間もいるのだな。起こってしまったことを恥ずかしく思う自分と、それでも尚、彼に対する怒りが収まらない自分が自分の中で交差していた。
「かはっ。かっ。何するんだよ」
「黙れ。帰れ」血が頭に上り、耳が熱く赤くなっているのが解った。
「わかったよお。ったく。昔はあの子もあんなじゃなかったのにね」
何処にでも良そうな母親のような口調で、おそらく、あの子って言うのは俺のことだろう。愚痴を言いつつ消え去る。
ふう、と深呼吸して、落ち着けと自分に言い聞かせる。がりがりと頭をかきむしり、自虐的な気分になる。はらはらと落ちる、油染みた髪の毛と頭垢を見ながら、ああ、そろそろ風呂入らなきゃなあ。いや、その前に床屋に行かなくてはなあと思い、こんな時でも人は新陳代謝を繰り返しているのだと、妙な気分になる。
ぶれている。軸がぶれている。
自分だって、そうだったじゃないか。
あの日、俺はララミーにキスをすることが出来なかった。ララミーはやっぱりなあ。と言う表情を浮かべ、「いいんだよ」と言った。
「仕方ないよね」仕方なくなど無かった。一般の人間と違い、大崎は薬学の勉強をしていたのだし、ＨＩＶがキスでは感染しないことは知っていた。識っていたのに。
耳の奥で、血が。濁濁（だくだく）と流れている。脳内で鳴り響くＦ（ファ）。その音は鼓膜（こまく）の中で大きくなり、Ｇ線上のアリアのようだな。と思った。

幸福、というのはこういう事なのだな。ララミーはそう思っていた。生まれてから初めていや、初めてではないにしろ、相当久しぶりにララミーは幸福を感じていた。

ＨＩＶに感染していると聞いたときには目の前が真っ暗になった。お子さんにも感染している可能性があるから人工的に流産させた方が良いですよ。ヤニで汚れた歯と赤黒い歯茎をむき出しにしてあの医者はそう言った。

中絶した。

元々、誰が父親かも解らない子供だったからこれでいいのだと思いながら、それでも哀しかった。これでいいのだ。これでいいのだ。

そう、自分に言い聞かせながら毛布にくるまり泣いた。

氷の男は、もう商売にならないじゃねえかよ。コンビは解散だな。と言って、ララミーの元を去っていった。孤独だった。

リハクはこんな自分をも受け入れてくれた。流石（さすが）にＨＩＶに感染しているという話と、中絶したことがある話と、父親にレイプされた話と、中学生の頃から体を売っていた話と、リストカット癖があったという話には（っていうか、それが私の今日までの一生なんだけどね）引いたみたいだったが、それら全てを受け入れてくれた。

そんな聖人のような、お釈迦（シャカ）様のような、仏陀（ブッダ）の様な人間が居ると言うことがララミーは初め信じられなかったけど、そんなララミーを抱きしめてそしてキスしてくれた。

「だめだよ。リハクにも感染しちゃうよ」

「大丈夫だ。ＨＩＶはキス程度じゃ感染しない。そもそも、ＨＩＶの発症を抑える薬が今は開発さえている。子供だってその薬を使えば通常に産むことが出来たハズなんだ」

ララミーは知らなかったが、リハクは彼女がＨＩＶのキャリアであると言うことを知ってから、薬学部の大学院に在籍しているというその立場も利用してＨＩＶに関する文献（ぶんけん）を読みあさっていた。

それまでララミーを診ていた医者はＨＩＶに関する知識も少なかったし、ＨＩＶに関して差別的な偏見を持っている人間だったので、リハクは病院をも変えさせていた。

そこまでしてくれるリハクをララミーは信じ、心酔していた。

そして、普通のカップルのように普通にデートできる日々を、ララミーは心底幸せだと思っていた。

幸福の種は他にもあった。

ララミーがある種心のよりどころにしているバンドが、ここ十年活動を停止していたのだが、冬から復活するというニュースが舞い込んできたのだった。

こんなことってあるのだな。いや、それは確かにタダの偶然だったのだが、しかし、彼女にとって二つの幸福が一度におそってくると言うことは必然であり、そして、世界は自分を中心に回っているという錯覚を覚えた。

そのバンドのヴォーカルがソロで出したアルバムの中に生まれ変わってもあなたに会いたいと言う歌がある。ララミーはこの曲と曲調が好きだったが、曲の終わり、「いい日があるから生きていこう」と某女優が病的に語りかけてくるパートが嫌いだった。いい日なんて来ない。生きていたって意味がない。本気でそう思っていた。

でも、いい日は来た。来たのだ。生きてきて良かったと。

ララミーはそう思えたのだ。心から。

今日もデートの約束があった。今日は教授がお盆休みを取っているから早く帰れそうだ。美味しいものでも食べよう。

最近は研究が忙しいからと中々会えなかったので（と言っても一昨日会っているのだが、しかし、ララミーにとってはその二日というのは億千万年にも匹敵するほどの長さだったのだ）、クローゼットに仕舞（しま）ってあるベイビーの新作に袖を通し、ちゃんとヘッドギアも忘れずに装着すると、ヴィヴィアンウエストウッドのロッキンホースバレリーナを履いて、玄関に置いてある全身鏡の前でポーズを決めた。

よし。可愛（かわい）い。

リハクはロリータファッションがそんなに好きじゃあないみたいだけど、ララミーにとってロリータファッションは心のよりどころであったし、彼女にとってフォーマルで可愛い格好というのはやっぱりロリータファッションだったから、結局、デートの日はいつもロリータファッションだった。

ま、手首の傷も隠せるし。

ちなみに、ゴシックロリータはそんなに好きではなかった。大好きなバンドも曲にしているくらいだし（ゴスロリの少女が綱渡りをして落ちて生まれ変わるという曲もある）、ゴスロリの方が好きなのだろうけど、ゴスロリはまっくろくろすけで、何処が良いのか解らなかった。確かに、ライヴ会場で見かけるゴスロリを格好良いと思うことはあったけど、ララミーは可愛くなりたいのであって、黒く、格好良くなりたいわけではなかったから、ゴスロリファッションは一切持ち合わせていなかった。

そこら辺をリハクはあまり解ってくれなくて、いつも、そのゴスロリ何とかならないのかよ。って言ってくる。ララミーが来ているのはあくまでロリータファッションで、甘ロリって言われるならまだしも（その呼び方もララミーは気に入っていないのだが）、ゴスロリっていわれるのにはやや抵抗があった。

それでも、リハクはララミーに合わせようとしてくれた。
ララミーが好きなバンドのＣＤも聞いてくれたし、活動停止中にそのヴォーカルが別に作ったパンクバンドのＣＤも聞いてくれた。
「俺は、この昔のバンドより、新しい方が好きだな」
と彼は言っていた。なんでも、昔の歌詞は彼にしてみれば重いのだという。パンクバンドのは似てはいるが、それをあくまでバカっぽく表現しているから、だから好きなのだという。
「この、湘南でチェーンソーを振り回す少女の歌っていうのは人生の機微（きび）を表しているよなあ」
殊更（ことさら）、その曲がお気に入りのようだった。キビっていう言葉の意味はよくわからなかったけど、笑って「ええ、そうね」と答えた。
湘南にゴスロリが真夏にロッキンホースバレリーナ履いて揺れているなんて、ララミー、お前みたいだな。そう言っていた。コレはララミーの歌だ。だから、俺はこの歌が好きなのかもな。
ララミーはゴスロリじゃなくてロリータなんだけどな。それに、その曲にはゴスロリとは書いてないんだけどな。と思っていたが口には出さなかった。
そんなことを思い返していると、バスは駅前に着いた。いつの間にバスに乗っていたのだと思う貴兄もおられることだろうが、リハクのことを思い返しながらララミーはバス停まで歩き、そして、駅前に向かうバスへと乗車していたのである。

そして、ララミーは死んだ。

※

東南新聞地方版（８月１４日朝刊）

１３日午後６時２０分頃、××市××町の一般市民より、「若い女性が胸を刺されて倒れている」と１１９番通報があった。女性は胸を刺されており、搬送先の病院で死亡が確認された。

調べによると、死亡したのは同市に住む無職の安岡刹那（やすおかせつな）さん（２３）。路上で胸を刺され、倒れたという。

犯人は特定されておらず、警察では犯人の特定を急いでいる。

東南新聞（８月１４日夕刊）

××市の無職、安岡刹那（やすおかせつな）さん（２３）が１３日に刺殺された事件で、安岡さんが病院に搬送される際、２６の病院で搬送を拒否されていたことが明らかになった。

安岡さんはＨＩＶのキャリアであったと言うことが明らかになっており、路上に倒れた際、近くにいた人が傷を手当てしようと近づいてくるのを拒んでいた。

安岡さんは３年前まで未認可の風俗店で働いていたことが明らかになっており、その際にＨＩＶに感染していたのではないかと推測されている。

まだ犯人は特定されておらす、警察では犯人の特定を急いでいる。

週刊レティクル（８月１７日発売号）

お盆の凶事。血塗られたロリータ服。

××市で無職の安岡刹那（やすおかせつな）さん（２３）が刺され、死亡するという事件が発生した。警察の発表によると、安岡さんはロリータ服という、中世のお姫様のような格好をしていたという。何でそんな格好で白昼歩いていたのかも気になるところだが、実は彼女、元々風俗嬢として男と寝ていたらしい。中学生の頃から働いていたと言うから驚きである。このお店、調べによれば、未認可のお店で、ノンスキンのお店だったと言うからさらに驚きである。そのおかげで、ＨＩＶに感染してしまったらしい。「そのことからいつも彼氏ともめていて生傷が絶えなかった」とは彼女の友人談。

警察ではこの彼氏に疑惑の念を抱いている模様。

ロリータ服もこの彼氏の趣味だったりして。

それにしても、ＨＩＶキャリアだったら家でおとなしくしておいて欲しい物である。

東南新聞（８月１７日夕刊）

××市の無職、安岡刹那（やすおかせつな）さん（２３）が１３日に刺殺された事件で、安岡さんが搬送される際、救急隊員がまだ若くＨＩＶの知識に乏しく、応急手当が遅れた可能性があると警察が発表した。

安岡さんは３年前まで未認可の風俗店で働いていたことが明らかになっており、ＨＩＶにはその際に感染したと思われる。

東南新聞（８月１８日朝刊）

××市の無職、安岡刹那（やすおかせつな）さん（２３）が１３日に刺殺された事件で、警察は同市に住む無職の男性、畠中洋一（はたなかよういち）（３４）を逮捕した。

調べに対し畠中容疑者は「リストラされむしゃくしゃしていた。誰でも良いから殺してやりたかった」と供述しているという。

週刊レティクル（８月２４日発売号）

８月１７日発売号において、ＨＩＶキャリアの皆様に不快感を覚えさせるような記述があったと多くの読者の方から指摘がございました。当誌ではこの事を重く受け止め、再びこの様なことがないよう深くお詫びいたします。

アブラゼミが鳴いている。誰も居ない部屋の中に、アブラゼミの鳴く声が響き渡る。否、誰もいないわけではない。私が居るではないか。私が。汗が頬を伝い、腕に落ちる。

気付けば夕方だった。アブラゼミの声にヒグラシの声が混ざる。蝉は、7年間地中に潜り、たった数日で交尾をし、子孫を繁栄する。そのためだけに、その数日間のために7年間闇に染まる。

闇。ああ、もう夜だ。

テレビを点けるとララミーの無機質な顔がアップで映し出される。

「刹那さんは未成年の頃から風俗嬢をしていたと言うことですが」

白髪のコメンテーターがララミーの悪口を言う。刹那？誰だ。ララミーはララミーだ。

この数日間、理博もマスコミに追い回された。警察に尋問まがいのこともされた。厭(いや)になってテレビを消す。

骨の入った白い箱を抱きしめ、又泣く。

ララミーの母親は浮浪者のような格好をして病院に来た。もう、家族の縁を切っていますから。こんなのは娘じゃない。ぼそぼそと警察と医者に告げていた。本当は来たくなかったのだが、警察に言われてやむなく来たのだとも言っていた。父親は来なかった。

「葬式等の処理は私がやりますから、やらせてください」

「こんなものを欲しがる何てあなた変わっていますね。面倒くさいことを全てやってくれるのと、あと、そうだ。十万円いただけるのならばこれ、売ってあげますよ」

こんなもの。これ。母親にそう言われる事が苦痛だった。ララミーを理解していたつもりで、ララミーの心の闇はもっと深く哀しい物だったのではなかっただろうか。

悔しさと怒りで、貯金をはたいてララミーを買った。

葬式を出す金もなかったし、彼女には葬式に来てくれるような友人も居なかったので、火葬だけにした。火葬を見るのは初めてだったが、お骨というのはこんなにも少ない物なのだなと思った。

これが、ララミーの全て。

普通、骨を拾うのは複数人の遺族で行うらしい。一人で骨を拾うのは珍しいのか葬儀屋の人がいぶかしげな目で僕を見ていた。

ことり。骨が崩れたのか、音が自分を現実に引き戻す。

もう、何日もこうしているような気がする。食事は何日食べていないのだっけ。涙が涙の跡の上をまた伝う。

ため息をつき、ふらりとｉＰｏｄの電源を入れる。ｉＰｏｄはコンポにつないであり、そこから音が流れる。ララミーが好きだった曲。自分が好きな曲。幸せに感じていたときの曲。

ランダムに曲が流れる。
屍(しかばね)と化した恋人の少女がゾンビになって蘇ってくる曲。そのゾンビを撃ち殺す少年の曲。綱渡りをしているゴスロリ少女が綱から落ちて死ぬ曲。死と生と。狂う曲。
ゲ。ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲ。
人は狂ったらゲゲゲゲと嗤(わら)うとその歌は歌う。ゲゲゲゲ。言葉に出して、それでも狂えない自分を笑う。
それでも、生きなくてはならない。生きていくだけだろ。ヴォーカルが嘯(うそぶ)く。生きていくだけだろ。生きていく。
嗚咽(おえつ)を抑えようと口元に手をやり、そう言えばヒゲも何日も剃っていないことに気付く。手も臭い。ああ、生きている。
台所から包丁を取り出して、みねを手の甲に付ける。冷たい。冷たくて死の向こう側の世界からやってきたような恐怖。この向こう側にララミーはいるのだな。
不意にドアが叩かれた。「週刊読内ですが。いるんでしょ？解ってるんですよ」別に居ない等といった覚えもないのに、その男はそう言う。別に会いたくはなかったが五月蠅(うるさ)いので、ドアを開ける。
「ああ、やっぱり居るんじゃないですか。なんですか。電気も点けないで。泣いて居るんですか。刹那さんの死んだ、違うな。殺されたか。あはは。いや、しかし、良かったですねえ。犯人。逮捕されて。他誌では大崎さんが犯人だなんて人もいましたけどね。いやいや、我が誌はそんなこと思っていませんでしたけどね。あはは。その件について2・3お伺いしたいことがあるんですけど」
ドアを開けた瞬間、その男はずかずかと部屋に上がり込んできた。仕方なしに、電気を点ける。
「ああ、なんですか。包丁なんて持って。自殺ですか。善くないですよ。止めましょう。ねえ。あんな女のために自殺なんて。ああ、これ、これがゴスロリの服って奴ですか。あはは。やっぱり頭がおかしかったんですかね。こんな恥ずかしい服を着て町を歩くなんて。あなたも災難でしたね。風俗嬢だったんでしょう？エイズにまで感染していたって言うじゃあないですか。検査しましたか。ちゃんと検査しておいた方が良いですよ。ああ、こんな気持ち悪い」
そこまで言うと、ララミーの形見に。ともらってきたドレスを広げながらその男は黙った。黙ってララミーの服の上に倒れ込んだ。最初は何が起きたのか自分でも解らなかった。
病気か？何かの病気でこの男は倒れたのか。
いや、違う。そうじゃあない。それはすぐに解った。いや、解っていたのだ。解っていたのだが、とっさのことだったので、自分の脳が理解することを拒んだのだろう。
僕は、彼を包丁で刺していた。

それでも、まだ、うう……なんで……などと五月蠅いノイズを発してきたので、さらに数回刺した。もっとも五月蠅いのはのどだったので、のどは切り裂いた。凄い勢いで赤い水が噴き出す。

　コチラを見る目が気持ち悪かったので、目も刺した。頭蓋骨(ずがいこつ)が邪魔をしてあまり深く刺さらなかった。右目は3度ほど刺して、左目は刺した後にぐるりと回したら、ぽろりと取れた。

　刺すのにも飽きたので、包丁を放り投げ、笑った。笑って泣いた。手が臭くてベタベタしていたので、手を洗った。風呂を沸かし、風呂に入った。暖かかった。

　風呂から出ても死体はそこにあった。邪魔だったけど、どこかに捨てるわけにも行かないから、とりあえず見えないように電気を消した。コンポから流れてくる曲は、すでにララミーの好きなバンドの曲ではなく、G線上のアリアに変わっていた。

　響き渡るヴァイオリンの旋律。F(ファ)。

　そうだ。人を殺しているときに流れる音はF(ファ)なのだ。

　脳の奥に流れるF(ファ)。G(ゲー)線上の。

　GGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGG。

　ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲー。

　目を瞑(つむ)り、思いをはせる。

　私は。人を殺したのか。何故。腹が立ったから。腹が立ったら人を殺すのか。否。殺さない。何故殺した。殺したかったから。否。殺す気などなかった。何故コロした。ナゼ殺した。殺したくないのに。人を殺してはいけない。ヒトゴロシ。何故コロした。人殺し。ヒト殺し。否。コロしていない。殺したかった訳じゃない。腹は立った。ララミーを侮辱されて(コロスコロスコロスコロスコロス)。でも、殺したい。訳じゃ。殺。殺す。

　ダメだ。どうもしっくり来ない。自分がおかしくなってしまったかのようだ。自分が殺したのは確かなのに、何故、自分が殺してしまったか解らない。遂に、おかしくなってしまったのか。

　鼻孔の奥に鉄の臭い、血の臭いが押し寄せてくる。吐き気がのど元まで押し寄せてくる。流し台に寄りかかり、口の中に人差し指と中指を挿入し、吐こうとするも、ここ数日何も口にしていないのだから、胃液しかでない。俺は、人を殺したのか。泣きそうな目になりながら、崩れ落ちる。

　血だまり。あの時もそうだった。血の泉にララミーがお姫様のように倒れていた。顔は蒼白で。救急隊員と野次馬が取り巻いていて。

「何故、誰も止血しないんですか」

　駆け寄って抱きしめ、傷口を強く押さえる。鼓動(こどう)は明らかに弱くなっていた。畜生。救急隊員が叫ぶ。

「危ない。彼女はエイズに感染して居るんだ(コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス)」

　そっちを一瞬にらみつけ、再びララミーを抱きしめる。

だからか。ララミーがＨＩＶのキャリアだから、野次馬（やじうま）も救急隊員も、ララミーを止血もしなければ、支えもしなかったというのか。

ララミーを抱きかかえ、先ほどの救急隊員をにらみつけ叫ぶ。

「救急車」

あわてたように救急隊員は救急車のドアを開ける。

色が。血の色が。臭いが。血の臭いが。

救急車の中で、ララミーの腕をそっとにぎる。「申し訳ない、救急隊員がまだ新人だった物で」いや、これは違う。これはその後の記憶だ。救急車の中では。何が。いや、そうだ。救急車は結局２時間走り、どの病院にたどり着くこともなく、ララミーは死んだ。

死んだ？誰が？ララミー？そうだ。ララミーだ。そして、この男だ。目の前で倒れている、この男だ。何故死んだ。何故殺した。

包丁を持っていたから。

そうとしか思えない。そのタイミングで、包丁を手にしていたから。だから殺してしまったのだ。

だから、……殺してしまった（コロシテシマッタ）？

ふと、我に返る。自分は人を殺してしまったのか。

ああ。もう、日常には戻れないのだな。刑務所は寒いかな。そう思いながら、ふとんを被って寝た。

翌朝は最悪の気分で目が覚めた。テレビを点けるとタモリが笑っていた。もう、午後なのだろう。部屋が大分鉄臭い。鉄臭さに混じって腐敗臭もするような気がする。蠅がたかっている。

このままでは、数日もすれば付近の住民にもばれるであろう。

歯を磨き、数分自問自答した後、セカイを滅ぼすことに決めた。

服を着替え、まだ残暑が厳しい外へと出る。東急ハンズにてチェーンソーを買った後、車を飛ばし、湘南に向かう。

湘南に着く頃にはもう真夜中だった。

……潮騒が聞こえる。

何だかとっても疲れていて、車の中で僕は眠ってしまったようだ。

水平線の向こうからさす日の光が、僕の目を覚ます。

警察官はコチラに銃を向けている。別にコレで誰かを殺したわけでもないのにね。右手の振動を見ながら思う。

撃たれたら、痛いだろうにな。何、それよりも早くやればいいさ。

「それを捨てて、投降するんだ」

銃を構えた警察官が言う。流石に、いきなり撃って来ないのか。
「俺は、お前らの居るこのセカイが憎い。お前らが存在する、このセカイが憎い。憎んでも憎んでも、尚、余り憎い。滅ぼす。滅ぼすよ。このセカイを。お前らを。俺も共に。お前らの存在なんか、認めてやるかよ。バーカ」
キッと睨み付け、舌を出して笑う。アハハハハハハハハハハハ。行くよ。ララミー。もう、覚悟は出来ている。僕と君は一心同体だ。一緒にセカイを滅ぼそう。

G線上のアリアが丁度終わり、ララミーの愛したあのバンドの曲に変わる。神様が選んでくれたのかもしれない。偶然にも、『ララミー』という曲だった。

嗚呼、ララミーは悲しい子だねえ。
嗚呼、ララミーは可愛いのにねえ。

チェーンソーの音が頭蓋骨に響き渡る。痛い。
ガガガガガバババババガガガガガガガガギギギギギギギュインギュインギュインギュインガガガガガガガガギギギギギギギギゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリガガガガガガガガガガガガミシミシミシミシミシミシミシガガガガガガゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリガガガガガガガガガガガガブシュウガガガイタイガガガガガガガガドドドドドドドドドドドドドドミルクドレスが真っ赤に染まる。綺麗だ。
警官が何か叫んでいるが、痛みと、楽曲と、チェーンソーの振動で全く聞こえやしない。目の前には砂浜。手から離れたチェーンソーは、胴体の切断に忙しそうだ。そして、痛みの果てに、ララミーの声が聞こえたような気がした。

さよなら。そして。こんにちは。
又、会えたね。
もう、離れない。

|
|
闇

こうして、大崎理博の手によって、全人類はセカイから抹消されたのである。

その後ｏｒつづき

もう秋が近いのだな。窓の外の銀杏（いちょう）を見ながらそう思う。冬が来る前には退院できるだろうか。まだ痛む腹をさすりながら思う。

テレビを点けると、例の事件についての報道がなされていた。

「世界を滅ぼす……か」

つい二月ほど前に自分が体験した事を思い出す。あの科学者は世界を救いたがっていたっけ。だが。

いや、偶然だと思ってはいる。だが。あの事件から数日後、私は癌の治療のために入院することになってしまった。それは事実だ。

早期発見だったから大事には至らない。と医者は説明してくれた。しかし、体重は落ち、今や見るも無惨な病人だ。

「兄貴。調子はどうだい」

がらりとドアが開き、弟が見舞いに来てくれた。

「あ、このニュース見ていたんだ」弟の顔が曇る。

「これ、お前の友達だったんだろう。家にもたまに来ていたよな」

「ああ、一回兄貴のつてで、何だかって言うマジシャンを見に行ったことがあるじゃん。あの時一緒に行った奴だよ」

「やっぱり。そうじゃないかと思っていたよ」

「気になる？やっぱり事件屋としては」

「うん、いや、もうこんな体だしね。ただ、何故こんな事をしたのかなと思って。あの時の彼は好青年だったし……それに……さ」

「チェーンソー一本で世界を滅ぼそうとしたバカ」

大崎理博の自殺騒動はそのように報道された。私がこの暇な病室でニュースを見て得た知識によれば、八月二九日夜、大崎は自宅に訪れた週刊誌の記者を殺害。腹部を数回、胸部を２・３回刺し、喉を十数回切りつけ、目をえぐって殺害した。

三〇日、死体を自室に放置し、町を彷徨った後、チェーンソーを購入。湘南へ向かう。三一日未明、湘南にて恋人の遺品であるロリータファッションを着ながらチェーンソーを振り回しているところを警察に通報される。警察到着後、覚悟を決めたのか警察の方をにらみつけ、「俺はお前らの世界を滅ぼす」と言ったようなメッセージを残した後、チェーンソーで自らの体を切断。急いで救急車を呼ぶも、即死。尚、チェーンソーによる被害は特になかったという。

それが、彼の最期だった。

「世界を滅ぼす……か」

ぽつりと又、口に出して言ってしまう。口に出してから、ああ、何て非日常的で、不可思議な言葉なのだろうと思ってしまう。

ファンタジーや夢物語ではないのだ。どんな独裁者だって、どんな大悪党だって、世界を滅ぼすなどとは言わないだろう。

それだけ、彼にとって彼女の存在が大きかったと言うことなのか。
風が吹き、カーテンが揺れる。
「ダメだよ兄貴。冷たい風は体に毒だぜ」
弟が窓を閉めてくれる。
「世界は滅ばなかったけどさ、兄貴の命は風船の灯火なんだから」
フフ。と笑う。術後の経過が良いから言える冗談だ。
「本当にそんなこと言ったら、俺、死んでしまうぜ」
頭を掻きながら言う。
「何言って居るんだよ。死ぬなんて言うなよ」
真っ青な顔で俺の方を本気で心配そうに見つめる。
「おいおい、そんなに心配そうに見つめられると、こっちが驚くぜ。お前が言い出したんだぜ。俺の命は風前の灯火だってな」
「風船の灯火な」
「なんだよ。風船て」
弟は言葉遣いをよく間違える。わざとなのかそれとも、本気なのかは解らないが、今のはわざとだったようだ。
「風船も知らないのかよ兄貴。ほら、あそこの子供が持っている」
見ると窓の外には風船を持った少年が走っていた。
「風船の灯火か。よく考えると意味解らないぞ。それじゃあ」
「いいんだよ。人生に意味なんてほとんど無いんだから。なあ、兄貴。解るか。世界に何億の人間が居ようと居まいと、地球は太陽の周りを回るんだ。ぐるぐるぐる、ぐるぐるぐる、阿呆のように」
「なんだ。又何かの本の影響か」
弟は良く本に影響される。先日も哲学書を読んだとかで、人間は考える足なんだよなんて知ったようなことを言っていた。葦な。と言うと、理博と同じ反応しかできないのな。何て言っていた。あれは、わざと間違えていたんだな。と思う。
「又、ね」頭を掻きながら弟は一瞬何かを考えた後、「ああ」と言った。いや、叫んだと言った方が近いかもしれない。
「兄貴。そうか。理博を殺したのは俺かもしれない」
「おいおい。優しくないなあ。病人だぞ俺は。驚かして殺す気か」
「違うんだ。『我思う故に我あり（コーギトー・エルゴー・スム）』だよ」
「又、哲学の話か」
「又、哲学の話だ。我思う故に我ありなんだよ。つまり、我が思わなければ我はない。いや、我が思わなければ我の居るセカイもない。我が思わなければそこに他者は存在しないんだ。つまり、自分が死んだ瞬間、自分のセカイは滅び、そのセカイから人類は抹消する。それが、彼の考えた『セカイを滅ぼす方法』だったんだ。俺が、それをアイツに気付かせてしまったのかもしれない」
弟はおどおどとした目で私を見た。

「待て。所詮、それはお前の妄想だ。彼の心の内など、誰にも解らないさ。『我思う故に我あり』というのは、世界が虚偽に満ちていようとも、世界の中でただそれを疑っている自分のみはここに存在していることが確実である。と言うことだからね」

私は弟の方を向いてにやりと笑った。

「だからさ。我思う故に我ありだとしてもだ。我思う故に、君ここにあることは事実であるとは限らない。と言うことだ。相手の心の内なんて解らないし、相手が本当に存在するかどうかだって疑わしいってことだね。そんなことよりも、コーヒーをくれ」

少し話したら喉が渇いた。弟が淹れてきてくれるコーヒーは美味いのだ。コーヒーの入っている魔法瓶を取りに行く弟からは、さっきのおどおどした感じは消えていた。適当に話してみたのだが、アレでどうやら納得してしまったらしい。まだまだ単純だな。

窓の外をふわふわと風船が飛んでいくのが見える。

ああ、さっきの少年は走るのに夢中になるあまりに、風船を離してしまったのだな。かわいそうに。と思いながら、俺の今の状況だって、そんなにかわいそうじゃない状況じゃないよな。何てことを思いながら、空に溶けていく風船を眺め続けていた。